

「西高フォーラム」第4回公開シンポジウム

シンポジウム「宗教は『こころの危機』にどう応えるか」

日 時：2008年6月21日（土）午後2時から4時30分まで

場 所：西高視聴覚ホール（西高正門を入れて左側の建物）

入場無料

パネリスト

池田 香代子氏（西19期） 翻訳家

関根 清三氏（西21期） 東京大学文学部・大学院 人文社会系研究科教授

島田 裕巳氏（西24期） 宗教学者

藤井 健志氏（西25期） 東京学芸大学教授

コーディネーター

菅原 伸郎氏（西12期） 東京医療保健大学教授 元朝日新聞「こころ」編集長

21世紀は、「こころの時代」とも言われました。しかし、みずから死を選ぶ人が減りません。1998年までの全国自殺者数は2万5千人以下でしたが、翌年から最近までは連続して3万人を超えています。先進国ではロシアに次ぐ自殺率だそうです。

とくに中高年の男性が高率を示しています。不況で仕事に行き詰まった人が多いため、といった分析もありました。でも、景気が持ち直してからも収まる気配がありません。若い世代の事例も含めて、経済的、社会的な要因だけではないようです。私たち自身の「こころ」の奥に、もっと深いところに、何かの危機があるのかもしれない。

暮らしは豊かになったものの、大切なことを忘れてきたようにも思います。青春時代以来、私たちは希望と夢のなかで過ごしていますが、孤独や死についてはどれほど学んでいるでしょう。本来は避けては通れない課題なのに、老いが迫ってきても先送りばかりしている気がします。

今回のシンポジウムでは、宗教の面からこの問題を考えてみます。諸宗教は「いのち」をどう考えているか、科学と世俗化の時代にあっても語りかける内容があるのか。日ごろは敬遠しがちな世界ですが、学び直すきっかけにしていれば、と思います。

西高卒業生の中から、とくに宗教や哲学の分野に進んだ方をお招きします。翻訳家の池田香代子さんは哲学小説『ソフィーの世界』を紹介しました。東京大学の関根清三さんは倫理学や旧約聖書学が専門です。宗教学者の島田裕巳さんはとくに新しい宗教の動向を調べています。東京学芸大学の藤井健志さんは、学校教育で宗教をどう扱うべきか、研究しています。司会役の菅原伸郎さんは新聞記者として宗教界を取材してきました。いささか重いテーマですが、21世紀の課題として、学校や家庭、そして自分自身の問題として、ともに考えてみませんか。